

佐藤譲二個展

2012年9月5日(水)-9月23日(日)



「逢い引き」2012

関係者各位

平素お世話になっております。

この度、佐藤譲二による個展を開催致しますので、ここにお知らせいたします。

佐藤の絵画作品は「映像イメージを絵画イメージに置換する」作業から生まれます。佐藤は、メディアに流布するイメージを映画的なオーバーラップの手法で何層も重ねることで、絵画への運動イメージの導入を試みます。そこでは輪郭や面から具象性が奪われ、抽象、カオスのイメージ、或はノイズイメージの世界が展開されます。「感覚器官のひとつが欠落したまま、世界を知覚する」作家の身体的条件を象徴するかのよう、佐藤の作品は一環してモノクロの画面であり、それはサイレント映画の表層のイメージの表現なのです。

本展で、佐藤は新作絵画を中心とした作品を発表します。

どうぞご高覧下さい。



[展覧会情報]

展覧会名：佐藤譲二個展

会期：2012年9月5日(水)－9月23日(日)

アーティストトーク：9月8日(土)17時半－18時

オープニングパーティー：上同日 18時－19時

開廊時間：12時－19時 (最終日17時迄)

休廊日：月・火曜日

会場：遊工房アートスペース

問い合わせ：〒167-0041 杉並区善福寺3-2-10

TEL) 03-5930-5009, FAX) 03-3399-7549, EMAIL) info@youkobo.co.jp

担当：村田弘子・進藤詩子

[交通のご案内]

公共交通機関：

- ・JR中央総武線「西荻窪」北口バス2番「上石神井」「大泉学園」行き「善福寺」下車すぐ
 - ・JR中央総武線・地下鉄丸の内線「荻窪」北口バス0番「武蔵関駅」「北裏」行き「善福寺」下車徒歩一分
- 自動車：青梅街道「善福寺三丁目」交差点南、桃井第四小学校北隣

[作家紹介]

一佐藤 譲二

1972 埼玉県生まれ

1997 東京造形大学美術学部美術Ⅰ類卒業

主な展覧会

- 1998 フタバ画廊、東京
- 1999 フタバ画廊、東京
- 「ONE DAY ONE SHOW」 FREE SPACE 3、東京
- 「第4回アート公募2000入選選抜展」、新木場SOKOギャラリー、東京
- 2000 モリスギャラリー、東京
- 2001 「リトルネロ -新世代の平面作家たち-」 文房堂ギャラリー、東京
- 「新世代への視点 -画廊からの発言-」 フタバ画廊、東京
- 2003 ベイスギャラリー、東京
- 2005 「RRR デファートフェスティバル2005」 横浜ラポール、神奈川
- 2008 現代HEIGHTS Gallery DEN、東京
- MOTT Gallery、東京
- 2009 「Analytic Limits」 AISHO MIURA ARTS、東京
- 「A trace of 10 years in Gallery Den」 現代HEIGHTS Gallery DEN、東京
- 2011 「ポコラート全国公募展 2011」 アーツ千代田3331、東京

[アーティストステートメント]

映像イメージを絵画イメージに置換する。僕の絵画制作は、ほとんどこの作業に拠っている。静止画である写真あるいは画像(本や雑誌の写真、ネット画像など)からくる映像イメージを使用している。しかし絵画イメージに移行するときは、時間概念を伴った運動イメージのほうに向かっている。映像イメージを目指しているといったほうがいいかもしれない。絵画という固定的で静止化された平面的イメージのなかで運動イメージを喚起させることができるもののひとつとしてオーバーラップという映画的手法を選択し、絵画のなかで導入する。フェードインからフェードアウトの間で複数の映像を重ねるオーバーラップのイメージは多層化し、具象イメージから抽象イメージへのベクトルが出現する。重層すればするほど、具象イメージのもつ輪郭と面が分裂され流動化していく。その果てには混沌としたイメージ、つまりカオスの世界が出現する。それは僕にとっての、視覚を中心としたノイズイメージでもある。

モノクロ画面は、サイレント映画による映画が音声に頼らなかったときの表層イメージである。感覚器官のひとつが欠落したまま、世界を知覚する僕にとってサイレント映画の世界は密接な関係にある。映画生誕からトーキー移行までの約40年の間、サウンドトラック無しのフィルムで見ることに専念し、映像を撮影・編集し、視覚上位の世界を創造してきた。今では当然のように映像と音声が一体化されているけど、映画とは根源を遡行していけば、単純に視覚的なものから出発した芸術的表現媒体であったのである。モノクロ画面による表層イメージの選択は大方無意識からきたものではあるけれど、視覚的イメージの純度が高い絵画の表層上でモノクロ画面を選択するという行為は、聴覚の欠如といった僕自身の持つ視覚的身体性からくる成り行きのひとつなのかもしれない。



「パレスチアから」



「暴力・革命・性」



「あさま山荘事件」